
俺の妃のそれがそんなに立派な可能性少くないわけがない

しろいるか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の妃のそれがそんなに立派な可能性少ないわけがない

【Nコード】

N1096BA

【作者名】

しろいるか

【あらすじ】

十六歳になった今、俺という健康優良美男子王子はますます絶好調だった。今日はと言えば六月二十日。暦で言えば満月で婚礼の儀式の日である。そう、俺は今日結婚し、男としても一人前になるのだ。いや……なる予定だったと言うべきか……。

そう……俺はその夜初めて、気付いたのである。

薄幸の美少女。アルベニス王家第三王太弟妃ケサ・カサンドラ・

カレニーナ。彼女の脚の付け根には、あり得べからず物がひとつ付いていた。

即ち端的に言って、彼女は彼女でなく彼、だったのである……。

第一部 一章 1

1

過去に実在した王族の物言いはと言えば、大抵は格式張っていて知性とか教養に溢れているものだったりする。

彼らは自分の戦場での活躍や政争の経緯を書き残したりしていて、例えばそれは一人称で言えば「余」とか「我が輩」みたいな感じのものが多いだろう。いや後の世に書かれる戯曲なんかでさえ、なんだか王族は威厳のある姿で描かれるのが一般的だ。

ところがそれはあくまで伝聞がそうなだけであって、後世に残るような書物に本音を記す馬鹿はいないし、本音を書いたとしても都合が悪かったり伝統に拠らなかつたりすれば周りの者に隠蔽とか、改変されてしまうのがオチだ。

要するに皆、必要に駆られて格好付けている。

断言しよう。あいつらは嘘つきだ。それが証拠に、俺は自分が「特別だ」と生まれて初めて意識したとき、ここぞとばかりに調子にのったものだった。

俺が王子だっ！

俺こそが王子だっ！

俺こそは選ばれし家系に産まれた、神の子なのだっ！！

領地を見下ろす巨大な白亜の城に住み、日がな一日その中を駆け回っている。たまに領地に降りるとなれば磨き上げられた白馬三頭引きの馬車に乗って、すれ違う領民は皆かしづく。そんな民草を車窓から見下ろす俺は爽やかな笑みを浮かべ、ヒラヒラと手を振っていたものだった。勿論どうやったって、食うに事欠くなんてことは無い。これで調子に乗らない奴がいたとしたら、そいつは頭がどうかしている。

十六歳になった今、俺という健康優良美男子王子はますます絶好調だった。

今日と言えば六月二十日。曆で言えば満月で婚礼の儀式の日である。そう、俺は今日結婚し、男としても一人前になるのだ。

領地の隅っこ、ユアハイムに広大な農園を有する貴族、カレニーナ家（ユアハイム公）の一人娘が俺の元に嫁いでくる。容姿端麗、明眸皓齒、黒髪で色白で目が猫みたいに大きい女の子、ケサ・カサンドラ・カレニーナ。この麗しの姫君が今日、俺の物になる。俺だけの、お姫様に。

実は世継ぎ　男児の持てなかつたユアハイム公はと言えば、領地を託するに一人娘を嫁に出そうと躍起になっていたところだった。だがその最中に公は胸の病で亡くなってしまった。奥方はもうだいぶ前に亡くなってそれから再婚もしていないから、要するに薄幸の美少女カサンドラは、齡十四にして、一人領地に取り残されてしまっていたのだ。

　　なんだか、可愛そうだな……。

俺がカサンドラを初めて見たときそう思ったのは事実だった。ラベンダー色のワンピースに身を包んで、彼女は一人、領地の只中にある塔に住んでいた。まだ右も左も分からないような　いや右左くらいは分かるだろうが、引っ込み思案の麗しの姫君が一人ぼっち窓辺で鬱々と空を眺めている。そんな光景はとも見ていられたものではなかった。だが俺には、助ける術があるのだ。王子なだけに！

彼女を嫁に迎え、ユアハイムを王族直轄領とする。
完璧だった。美談だった。合理的で経済的で、そうして全てが薔薇色だった。

城門から城内の大ホールまで三十分はかかるつかという赤色の絨毯の上を俺は彼女と手を繋いで堂々と歩き、駆けつけた者共の歓喜と熱狂が渦巻く中で永遠の愛を歌い上げ、誓ったのだった。

祝福のラッパが鳴った。

舞い散る七色の花びら。見守る数百の近衛兵が剣を捧げる音が大

ホールに木霊する。

美人の妃、約束された人生。俺は高らかに笑い、皆がそれを祝福した。

それが、どうしてこうなった……。

数時間後、天蓋付きのベッドの隅に腰掛けて、俺は真っ白に燃え尽きていた。初夜という官能的な響きで飾られるその夜に、蒼い月明かりの中でカサンドラの真白い尻を見て俺は震え、戦いたのだった。

そう……そのとき初めて、気付いたのだ。

薄幸の美少女。アルベニス王家第三王太弟妃ケサ・カサンドラ・カレニーナ。彼女の脚の付け根には、あり得べからず物がひとつ付いていた。

即ち端的に言って、彼女は彼女でなく彼、だったのである……。

仄暗い寝室。天蓋付きのベッドの上には純白のウエディングドレスを身に着けたままのお姫様。初夜と言えば互いに礼服のまま寝室に下がりそこで事に及ぶというのが習わしで、先祖代々受け継がれてきたその伝統を趣味がいい、と俺は内心褒め称えたものだった。

いやつまり、それはウエディングドレスのまま頂きます的な、謂わば王族の隠された変態性の現れなのだが、その背徳感が通常では考えがたいほど俺や俺の息子を奮い立たせてもいた。こうして事が、判明するまでは……。

「どうした、抱いてはくれぬのか？」

耳元にカサンドラの声が響いた。背後から縋るような、女にしてはやや低い声。その甲高い倍音だけが、少女めいた艶をようやく演出する。

「いや……」

素っ裸の俺はベッドの隅で脚を下ろして座ったまま、頭を抱えた。脳裏にドレスをひん剥き四つん這いにさせたその時の、生白い尻が貼り付いたままだった。そうしてその、奥に見えた物も……。

「って言うかちよっと待とうよ」

俺は半ば震える声で尋ねた。

「なんて言うか、その……脚の間にある物は、一体なんなの？」

背後でわしゃわしゃと衣擦れの音。恐らく自分で確認しているのだろう。しばらくしてカサンドラはしれっと答えた。

「おちんちん」

「分かつとるわ！ そんなもん！」

怒声を上げて振り返ると、カサンドラは首を傾げてきよとん、と此方を見ていた。いや、きよとん、じゃないが。

「って言うか、どういつつもりだ？ まさかと思うが、それが付いていたことに今まで気付かなかった、なんて白々しいことを言うんじゃないだろうな？」

カサンドラは再び首を傾げ、堂々と言ったのけた。

「産まれたときから、付いてる」

俺は深々と溜息した。このとき初めて胃が痛い、という感覚に襲われた。

「ならどうして……嫁になんか来ようと思ったの？」

「どうして？」

カサンドラはさも不思議そうに小声で言った。誰に聞かれるわけでもないのに、きよろきよろと周りを確かめてから。

「嫁に来てはいけなかったか？」

「おいおい」

俺は思わず鼻で笑った。

「男がお嫁に行けないのは、法律で決まってるよな？ って言うか常識的に分かるよな？」

カサンドラは眉を潜めた。

「男がお嫁に？ それはそうだな。おかしな話だ」

「おめーな」

怒り心頭。俺は我慢できずに、とうとう立ち上がった。彼女

もとい、奴の物とは比べものにならない、極悪な物をぶらりと暗がり露にしたまま。

「いいか、もう一度だけ聞く。男のお前が一体なぜ、王家に嫁入りしようなんて考えた？ ……或いは誰か貴族の差し金か？」

貴族の差し金ってのは俺を逆上させる想像だった。怒りで思わず、胸の筋肉がひくひくと痙攣するのが分かる。

「男？ 何を言っている」

婚礼前に約束した事がひとつある。夫婦生活において硬っ苦しい物言いは絶対に無し、普段通りに接する事。端的に言って俺の趣味からそうした事を押し付けたのだが、この際それが悔やまれた。

目の前にいる妖艶な男の態度が、ますます太々しく見える。

「わたしは女だ」

真顔で言う奴のはだけた胸元　洗濯板のようなその胸板を見て、俺はふっ、と苦笑した。良い度胸だ。或いはもう、居直るつもりか

……。

「いいだろう」

ベッドから離れ、俺は寝室の中　ふかふかの絨毯の上を裸足のまま音もなく歩いた。壁に飾られた装飾用の、だがしっかりと研がれた大剣。それを手に取ると、鞘をぶん投げ、剥き身を手にしたまま再びずかずかとベッドまで歩み戻った。

或いは交わろうとしたその瞬間、懐から短剣でも抜いて暗殺を謀ろうとしたのかもしれない。手にした白刃に目を細めた刹那、そんな考えが脳裏を過ぎった。殺されるほど怨まれるような憶えもないが、しかし俺もどうしようもなく鈍い、と自嘲の笑みをわずかに溢し、そうして奴の目の前で、仁王立ちになってやった。

「直れ」

本当なら人を呼び捕えて、誰の指示でこんな真似をしたのか吐かせるべきかも知れない。

「余を愚弄したその大罪、命を以て償わせてやる。有り難く思え」
だがこのとき俺は、最早完全にブチ切れていたのだった。

ベッドの前で、斜めに大剣を構える。いくらいい加減に王子をしてきた俺とて、ここまでコケにされれば本気で頭にくる。暗殺者だかなんだか知らないが、奴が震えて後退りするのを喜々として眺めながら、この手でブチ殺してくれろ。　この、男女めが。

俺の腕であれば奴のか細い首など一撃で綺麗に吹っ飛ぶことだろう。その装った澄まし面のまま、哀れにも地面を転げるがいい。ごろごろと虚しく転がる奴の首。主を無くした身体が糸の切れた操り人形の如くくずおれる。その返り血を浴びてこそ、俺の溜飲もすっかり下がるといふものだ。

柄を握りしめた。

ところが次の瞬間、目の前の光景が信じられなくて、俺は呆気に取られたのだった。

「あ……？」

恐れ戦き震え上がるとばかり思っていたのに、奴はベッドの上で半身だけを起こし、やがて静かに三指を着き、そうしてその首を俺の眼前へと差し出したのだった。

「仰せのままに」

俯く奴がそうのたまって、その首の後ろで黒髪がはらりと垂れた。意表を衝かれた俺は、狼狽し、その動揺を押し隠さんとして剣を逆構えに持ち替えた。かちやりと柄の飾りが鳴る。

「ま、待て」

乾いて、変な声が出た。

「貴様の首を跳ねる、と言っている。……分かってるのか？」

奴は俯いたまま、微かに頷いたようだった。そうして静かに声が流れる。

「どのような粗相があったのかは、恐れながら理解することができません……」

俺はその物言いに、目を細めた。

頭を垂れた奴の白いうなじが、窓から注す青い月光に染まっていた。

「わたくしは農業貴族の家で育った、浅学で無知な、愚か者です。

けれど、王太弟様が望まれるのであれば、それがどのような願いで在れ従うのが妃の勤めと聞いています。お討ちになりたいと言っているのであれば、この命喜んで差し出す事こそ、礼儀と心得ます」

そうして沈黙が流れた。俺はその首筋に、ぴたりと冷たい剣先を突きつけた。

「神の御名のもと、アルフレト王太弟様とアルベニス王家に、益々のご繁栄が訪れますように」

奴がそう呟き、そうして一瞬、微かに身を強ばらせるのが分かった。

覚悟だろっ。

おれは剣を振り上げ　そうして脇へとゆっくり下ろし、一歩下がった。

「立て。それから、ドレスを全部脱げ。……裸になるんだ」

俺は残飯を食らう捨て犬のような懸命さでもって、奴の服を隅から隅まで検めた。その間奴は素っ裸にしたまま、部屋の隅に立たせておいた。　だがどこにも、武器らしき物は見当たらない。このとき髪留めも全部引っこ抜いて調べたので、ベッドの上に再び座らせたと時のカサンドラは頭もぼさぼさ。まるで山賊にでも襲われたような、散々な有様だった。

「信じられんな……」

月の光の歌声に消え入ってしまいそうな俺の呟き。

それから一番鶏が鳴くまでの間に彼女の口から語られた話は、俺の想像を遙かに凌駕する、実に奇々怪々とした物語なのであった。

カサンドラには一歳違いの兄がいた。

これは彼女が養子 もらわれっ子である事を意味する。即ちユアハイム公の実の子はその兄だけという事になるが、その兄は随分前に流行り病で死んでしまった。

ユアハイム公は誠に男気溢れる熱い男であつたから、この時公が号泣したという話を俺もいつか聞いたことがある。そうしてもうひとつ聞いたことのある彼の逸話、即ち信じられないほどにピュアである、という性格こそが、この場合災いしていると言つていい。身体はデカいくせにとんでもなく奥手で、からきし女が苦手なのだ。だから公は再婚もしなかつたのだらう。

「物心ついたときには既に父上の所にいたから、それ以前の記憶は曖昧だ」

と、カサンドラ自身は証言している。

どこで養子にしたのか、或いは人情味の厚い公の事だから、戦災孤児でも拾つてきたのかもしれない。とにかくカサンドラがもらわれてきたとき、彼は既に女であるという自覚を持っていた。というより、産みの親がそう育てたのだらう、きつと……。

そうしてユアハイム公は男手ひとつでこの子を育てるのに、さんざ苦労したようだった。なにせ女の子だという頭があるから、着替えや、風呂に一緒に入ってやることも憚られる（と言うより公の場合、単純に恥ずかしかったのかもしれないが）。

養子を手籠めにするクソ貴族さえいる中で、彼のこの純朴さは賞賛にさえ値するかもしれないが、とにかくユアハイム公はカサンドラの裸体をまったく見ることなく育て上げ、そうして死んでいったのだ。

お陰でカサンドラは誰にも男の子だと知れることなく、且つ自分でも気付かずに大きくなってしまったのだった。だから詐りの罪があるとすれば、それは育ての親にこそにある。即ちこの場合、誰も責めるべき者が見当たらない、と言う事。が、そうと分かって納得できるもんでもない……。

「おかしいとは、思っただんだ……」

ベッドの上のカサンドラは少々凹んだ様子だった。無理も無い、と俺は同情をするように頷く。

「女なのにおちんちんが付いてるなんて」

「違うだろっ！」

冷静さを取り戻しかけていた俺は、声を荒げていた。

「そうじゃなくて、お前は男なんだよっ！ 男！」

すっかり礼服を着直し、その胸元にずらりと並んだ勲章をちらちら言わせながら俺は、男、男なんだよ、と呟きながらベッドの周りをぐるぐると歩いた。けれどカサンドラはこのとき初めて、表情を変化させたのだった。

「ちがう！」

まるで人形みたいに澄ました眉が、八の字につり上がる。

初めて見た彼女 もとい彼の表情は、怒り、だった。その少女然とした、感情を押し付けてくるような怒り。

「男じゃない……。わたしは女だ」

彼女は低く言って毛布を胸元に抱き寄せると、微かに首を振った。頑固この上ないと言うか、溜息しきりだ。

「あのなあ……」

俺は立ち止まり、諭すように言ってやった。

「まあ分かるよ。そう育てられたんだから。認められないって言うか、簡単に信じられないのは。けどなあ……王族の妃って言えば、まあ土地どころこの政略的な意味もあるけど……」

「あるけど？」

小さく言って、首を傾げる彼女 もとい……いや、可愛いと思

つたら負けなのだ。

俺は咳払いをして、続けた。

「いいか、ただのお気楽なボンボン、第三王子の俺とて、使い道があるということだ……。即ち子を作り、育てあげる事。無論兄上達の子こそ世継ぎとなりその重責を担っていくのかも知れないが……とにかく保険として、俺も子を持っておく必要がある。そうして血を絶やさぬ努力をするというのが、結婚が持つ本来の役割というか、意味だ。分かるだろ？」

彼女は頭の上に疑問符を浮かべて、首を捻った。

「ごめん、よく分からない。どういう意味だろうか？」

よし……。ここは単刀直入にいこう。

「お前妊娠できないじゃん」

「えっ」

カサンドラはびっくりしたように肩を竦めた。

「なぜ？」

「なぜだって？」

頭の血管がミシミシと音を発てるようだった。

「じゃあ聞くけど、お前はどっやって俺のこの、これ！ これを受け入れるんだっ！」

だいぶ訳が分からない物言いだったが、股間を指させば意味は知れる。

「さつき見たじゃないか……」

カサンドラは少々顔を赤らめているようだった。

「ついていて駄目な物があるのは嫌だし申し訳ないと思うが、女の穴はきちんとある！」

「それって違うからっ！」

俺が手振りも仰々しくもどかしい怒りを露にしたのだが 彼女は覚悟したようにベッドの上で四つん這いになり、再びドレスをたくし上げた。

「うおー！」

俺は奇声を上げた。

「さあ、抱いてくれ」

カサンドラの恥ずかしげな声が微かに漏れる。

「頑張つて、子供を作ろう！」

「頑張つても無理があるし！」

「しかし抱いてもらわなければ……」

カサンドラの目元がじわりと滲んだ。

「一体死んだ父上になんと言って申し開きをしようか……。ユアハ
イムの女はそんな努めも果たせぬものかと、きつとみんなから笑わ
れる」

「ま、待とうか……」

危つい、物憂げな表情。突き出された尻の前で俺はがっくりと膝
を着き、眉間を押さえた。

ドレスのスカートから覗く彼のまつ白い、太股と尻。

「と、とりあえずしまつて。風邪ひいちゃうし……」

しゅんとなつて言うとおりにするカサンドラ。

だが言い訳だ。それを見たくないと思うのは、決して汚らわ
しいと思うからでなく、その女らしさに一抹の魅力を感じるからな
のだが、そうと認めては道を違えると思えば抗つて、とうとう気力
が尽きて俺は立っていられなくなったのだ。

声も、顔も、身のこなしも、全てが少女然とした魅力に溢れてい
る。しかも美人だ。それは認めよう。……だが誠に残念なことに、
俺は男色に嫌悪感さえ感じるし、なにより事態は抱く抱かないの問
題を遙かに越えたものの様に思える。

「そ、そうだ……」

思い立って、血の気が引いた。

俺はこの事が父上、即ちアルベニス王に知れる事こそを恐怖した。
十年前のある事件を切欠に父上は気を病み病床に伏せっていて、こ
んなことを知ってしまったらきつとショックで死ぬようにも思われ
る。　　って言うかそこまで行かなくても、むちゃくちゃ怒られる

のは間違い無い。

というか、既に結婚式が国を挙げて行われた後であり、どの国民も、どの貴族も、領民数多に漏れずカサンドラは王太弟妃として、既に認知されてしまっているのだ……。

実は男でした！　テヘツ　みたいな事になったら、全体どうなることだろうか？

「あの馬鹿王子、またやってやがる」

「三男坊とかこれだから使えねえんだよ」

「男と結婚？　流石は素行不良も極まれりですな」

城下のクソ餓鬼共や、気取った貴族共のあざ笑う声が聞こえてくるようだった。

くそっ！

くそくそくそくそくそっ！

俺のせいじゃないのにつ！

「どうするうっ……！」

俺は床に両手を着き、普段あまり使わない脳みそをフル回転させ懸命に考えていた。やはりこのまま殺してしまおうか？　いや、

それこそ大層な騒ぎになって、俺は乱心者扱いされてしまいかねない。それならこのまま誤魔化し続けるか……いや、一体どこまで誤魔化せば切り抜けられるというのか？　って言うか俺の薔薇色王族ライフは一体！？

そのときコンコン、と寝室の扉がノックされて、俺はびくりと立ち上がった。

「だ、誰だ！」

おはようございます。

扉の向こうで年増の女の声がした。

メイド長だ。カサンドラの身の回りの世話をしている、クソ真面目なおばさん。

「くっそ！」

今の姿を見られるわけにはいかない。俺はとりあえず毛布をぶん

投げてカサンドラをその下に隠し、窓の外を見やった。空は既に白んでいる。蕩々と話し込む内、夜が明けてしまったのだ。

扉の向こうで再び声。

王太弟妃殿下を、お迎えに上がりました。

「お、お迎え？　なんでだ！」

はあ……。

気の抜けた声が聞こえてくる。まあ、あのおばさんが俺のことをあまり好いてないというのは知っている。が、この際そんなことはどうでもいい。俺の心臓は既に爆発寸前だった。

妃殿下の、お召し物を……婚礼の儀の格好のままでは、城内で過ごしにくいかと。

「くっそ……！」

混乱に髪を掻きむしった。

着替え。そうだ……。高速で考えがみるみる浮かんで、俺は歯噛みした。

よしんばこのまま、今日一日だけでもカサンドラを着替えさせないことが可能だしよう。が、いつかはばれる。何せ王太弟妃ともなればお付きの女が服から何から脱がしてやって、風呂に入れてご丁寧に身体を洗ってやるのだから……！

「おおああああ！」

俺はその光景を想像して、絶叫した。メイド長やその部下の女共が浴室で露になったカサンドラの物を見て凍り付き、震えながら頭骸骨をカタカタと鳴らせる。

「だ、駄目だっ！」

駄目！　と俺はメイド長に向かって大声で叫んだ。

駄目って、何がです？　と彼女は面食らったように言って返した。俺は出鱈目な調子で叫ぶ。

「わ、我々は今日このまま……この、今の格好のまま士官学校に行く！」

士官学校？　なぜです、と言ったまま侍従長は絶句した。

「なぜ？ 決まってるだろうが！」

俺は十四歳の頃、即ち『抜き身のサーベル』と呼ばれ恐れられていた不良少年時代の頃を彷彿とさせる奇声を装い、その台詞を叩きつけた。

「見せびらかしに行くんだよ！ 餓鬼共に俺のお姫様をよっ！」
毛布から頭だけ出したカサンドラが、きよとん、と首を傾げていた。

長きに渡る飽くなき戦いの日々が始まりである。

精神的疲労と寝不足で目玉がゴロリと裏側に落ちてしまいそうだ。本来ならば目眩く官能の一夜を明かした俺は、今頃自慢の大胸筋を晒したままベッドサイドに運ばれた大人味のコーヒーでもすすつて微笑んでいたはずだというのに……。今は士官学校へと向かう馬車に揺られていた。

ガガガガッ！ ヒヒィーン！ と荒ぶる馬車の客室の対面には、ウエディングドレスを着たままのカサンドラ君が座っている。陽に当たれば解けてしまいそうなその白い面が、今は別の意味で眩しかったりする。何をか況んや、直視できない、という意味だ……。泣きそうだった。

一体俺がどれほどの結婚を待ち侘びていたことか……。せめて諸君らには俺の気持ちを分かってもらいたいところだが、その前に我が国アルベニス王国について少しだけ説明しておこうと思う。

大陸中央には、覇権国家として君臨する大国、神聖クロギアス帝国がある。

その同盟国として東隣にひっそり寄り添う我がアルベニス王国は、端的に言って小国だ。小国だが、帝国の強大な軍事力に守られていられるお陰で国内はのんびりと平和である。土地も豊かだ。

だから帝国が言いつける少々の税金や派兵要請にさえ応じていれば、領民も国王もまったく生活に困るなどということは無いのである。周りとは言えば、同じように帝国におもねる同盟国ばかりだ。

そんなわけで、アルベニス王家は神聖帝国との架け橋となる大事な血筋でもある。皇帝陛下とアルベニス王は、同盟発足以来厚い信頼で結ばれてきたのだ。だからこの、のほほんとした平和を手放したくないと思えば、相当の馬鹿で無い限り王族には逆らわない。

お陰で王族の端くれたる俺も散々調子にのって生きてきた訳だが、三男坊だけに悩みもあった。つまりは末っ子であるからして、王様

に成る、という展望についてははなはだ絶望的だったのである。

たまたま早く産まれただけで、兄上は貴族や領民の羨望の眼差しを集める。母上からも大事にされる。そうして王族に逆らえない、という不満を抱えている卯建の上がらない貴族共などは、単純に一番使えないハナタレ小僧の三男 即ちこの俺、の短所なりなんなりを突いて笑い者にして、溜飲を下げるのである。

お兄様達と違って、アルフレト様はあまりお行儀がよろしくないようすなあ。

そんな言葉を耳の端で捕える度に、俺はちよつとずつグレていった。いやシヨックだったのは、そういう貴族の話に喜々として頷き、愚痴を零す母上の横顔だったのかもしれない。

その貴族との関係を優先したいならば、未っ子の俺の事など平気でこき下ろすのが俺の母親である。言ってみればこれも、王侯貴族がゆえの社交、習性だ。神聖皇帝を曾祖父に持つ母上は特に、貴族としての矜持が高いのだ。

とにかく十代の初めに士官学校の荒くれ共と仲良くなって、俺はそいつらと一緒に無茶苦茶をやりまくった。貴族の馬車を落としたり穴に落としたり、その餓鬼共を決闘の場に誘い出してボッコボコにしたり、名を偽って闘技場で荒稼ぎしたりして、散々問題にもなった。

楽しかった。

『抜き身のサーベル』という恥ずかしい二つ名で呼ばれていたのは、この頃の話だ。

結果的に俺は貴族共にそっぽを向かれ、手の付けられない不良として城内でも孤立し、従って今俺の配下にいる者はそのときの不良仲間ばかりだったりする。

形式的に任されている軍隊 アルベニス王国第七軍団の軍団長に始まって、俺の身の回りの世話、警護をする奴や、書記官までもが皆そうだ。それ以外の奴らは、未だに俺のことを避ける。

だがそろそろ十六になろうという頃、ある事件を切欠に俺は更正

し、身を固めようと心に誓うことになったのだった。思い出してみれば、それは城下に初雪が降ろうとしていた頃

「お前平民の子だろう？ 許されるわきやないよな？」

俺がその声をふと耳にしたのは、学校をサボって仲間と連れ立ち、城下町の程近くに流れるエルド川の土手を通りがかった時のことだった。

十二月ともなれば風は肌を切るように冷たい。

俺や俺の仲間達はぼろぼろの士官候補生用のロングコートを着崩して、「ヒイラギの実を一番多く集めた奴が勝ちです！」みたいな下らない遊びをやっていた帰りだった。

何事かと声のする方を振り向けば、川辺には少年の姿があった。

寒空の下、その子は下着一枚の姿のまま、幾人もの貴族のボンボンに囲まれている様子だった。

耳を澄ませば、リーダー格のボンボン曰く。

「貴様のこの、こ汚い上着一枚が洗濯代の代わりになるとでも思っただか？」

あんつ？ とそいつは顎をしゃくって続ける。

「泳いで見せろよ。お前は俺の、母様にもらった大事なコートに泥を跳ねた。これはその当然の報いだ！」

そう言う奴の厚手の青いコートの背中に、確かに泥が跳ねている。そのすかした声 あいつは知ってる。確か城の祝賀会で一度見たんだ。帝国との国境沿いに広大な土地を有する貴族、ハーパー公。その小倅ヨアヒムだ。俺と同年で、長男。大貴族の子息で跡継ぎともなれば、地元で幅を利かせている。

いじめられっ子の平民は、む、無理です、やめてください、と自らの肩を抱いて歯を鳴らしている。その上手く物を言えない様子に、困んだ連中が大笑いをする。

「お前、内心腹立たしくて仕方がないんだろう？」

「そ、そんな事ありません。お、お願いですから許して下さい」
平民の彼はただ、がたがたと肩を振るわす。その息が比喻ではなく、本当に真つ白だ。

「いいんだぜ、俺は優しいから」

ヨアヒムの奴はそう言つて、手下から剣を受け取る。レイピアだ。貴族御用達の、気取った柄の黄金の輝き。ヨアヒムは剣を受け取ると鞘から抜き、それを相手に向かってぶん、と投げた。平民の方がびくりと肩を竦める。足元の草むらに、その細身の剣が突き立った。

「取れよ。俺と決闘して貴様が勝てば、それで白紙に戻してやる」
無茶苦茶な話だ。

だがヨアヒムが言うと、周りがげらげらと囁し立てた。取り巻きはどれも生まれたての子豚みたいな腹をしていて、それがゆるゆると揺れる。

「さあ構えろよ」

ヨアヒムはもう一本のレイピアを受け取り、それで二三度風を切つて見せると、気取った調子で構えた。ふむん、なるほど様になつてるが、まるで白鳥の舞いじゃないか……。俺は思つて、クククと肩を揺らせた。だが平民の子はもうブルってしまったて、剣を交えるくらいなら川に飛び込んだ方がマシだと言わんばかりの勢いだ。この寒さでいきなり川に入れば、死ぬかも知れない。

だから、餓鬼ながらにヨアヒムは悪知恵の働く奴だとも俺は思った。決闘の機会を与え、それから逃れる為に川に飛び込んだと成れば法的な罪は無くなる。とまでは言えないが、貴族には有利に働く。逆に立ち向かつてくれれば思う壺で、ヨアヒムがどう料理しようが問題ない。

貴族つてやつは、多かれ少なかれ、そうして狡賢いもんなんだ。
俺はごきりと首を鳴らせた。

「どうする？ アルフレト」

後ろから仲間の声がかかった。同じクラスのグリード・『マッド』

・デッカーだ。

「どうするもクソもねえだろ？」

「だよな」

デッカーが自慢の長髪を揺らして笑う。

俺は決闘のステージを指指してざくざくと土手を降りて行った。

そうして俺以下士官候補生のコートを羽織った深緑色の集団が、ヨアヒムらに歩み寄る。人数は五人。お互い様つてところだろう。

「よ、ヨアヒム！」

それまで薄ら笑いを浮かべていた豚の一匹が、俺達に気付いて早速青くなった。

「あんっ？」

振り返るヨアヒム。俺達を見てぎよっとする。

「な、なんだお前ら」

反射的に手にしたレイピアを下段に構えている。

「決闘と見受けたが、どうだい？」

俺が両手を広げ、にやにや笑いを浮かべて言うと、その調子が気に食わなかったのか奴はまくし立てた。

「なんだなんだ、貴様らには関係なかるう？　これは貴族の名誉の問題だ。遊びたいなら他を当たれ」

奴はじろりと俺達を見渡す。

「士官候補生ごときが、次期ハーパー公たる僕の名誉ある決闘に口出しするか？」

ひゅー、と俺の後ろで誰かが口笛を鳴らす。

その余裕を見て、ヨアヒムはまさか、と言った感じで少し怯む。

自分の名に余程自信があったのだろう。俺はかまわず言った。

「あくまで決闘だって言うなら、俺がその代理騎士を務めるぜ。そちらさんは、寒さで手が上手く動かないみたいだ。　そうだろう？」

平民の子は上手く答えられない。しゃがみ込み、紫色の唇を振るわせながら焦点も定まらぬ目でこちらを見ている。仲間の一人、デ

リードリヒ・『トリック』・ゲイルが、自らのコートを脱いで、その子に羽織らせてやった。

「うっ……!!」

コートを脱いだゲイルを見て、貴族共がいつそうたじろぐ。

ゲイルはコートを脱げば中はタンクトップという変態趣味だが、その剥き出しになった筋骨隆々たる上半身は、大判の切り傷、縫い傷で一面埋め尽くされていた。

歴戦の喧嘩傷だ。　　と言いたいところだが、実は前に馬車で競

争っていて滅茶苦茶にクラッシュしただけの話だった。実家から失敬してきた馬車が賭けレースの途中で横転し、客室の硝子がブチ割れ、見事手綱を握っていたやつに降りかかったのだ。その晩奴が親父さんに死ぬほどボテくり回され、そっちの方が瀕死の重傷だったのだが、当然この場では黙っておく。

ゲイルはしゃがみ込んだ平民に向かって何やらうんうんと頷き、芝居がかって言った。

「決闘はお前に任せる、存分にやってくれ!　と言っているぜ?」

「よし分かった。引き受けよう」

俺は一步前に出た。ヨアヒムの方へと歩み寄る。

「ば、馬鹿な」

青くなつてヨアヒムは言った。

「分かっているのか?　貴様ら王立士官学校の生徒は、王の僕たる者共だろ!　その主人たる、アルベニス王と肩を並べんという大貴族、ハーパー公の嫡子だぞ!　わたしは!」

「王と肩を並べる?　聞いたことねえな、そんな話……」

「な、なんだと!?!」

思った通り、面は割れていなかった　　というか、こんな格好で俺だとばれようはずもない。

ヨアヒムと対峙すると、俺はコートの前をはだけて、腰元の剣を露にした。

「ば、馬鹿が。……後でどうなつても知らんぞ……」

見上げたものと言うべきか　まあやけくそだったんだろうが、
ヨアヒムは引かない。

だが子豚の一人が俺の剣を見るなり声を上げたのだった。

「サ、サーベルだ！」

ヨアヒムはなんだと言って、そいつの方を振り返る。

「いちいち騒ぐな。当たり前だろうが？　軍人がサーベルを持つのは」

「そ、そうではなくヨアヒム様！　さ、鞘が、無いのです！」

「ああ？」

ヨアヒムは言われて眉を潜めると、俺の腰元に視線を落とした。

誰もそこに目を向ければ、ベルトに柄が引っかけられただけの、抜き身のままのサーベルがあるのに気付くだろう。使い古され、白刃だけがきらきらと光る、伝統ある軍御用達の無骨なサーベル。

それは貴族が持つレイピアと、対照的な輝きを放つ剣だ。

「よ、ヨアヒム様っ！」

豚共が言った。

「士官学校の『抜き身のサーベル』と言ったら……」

「あ、アルベニス王家の」

「第三王子、アルフレト殿下です！」

そこで、気付いた連中はウェーブみたいな調子で一齐に跪いた。

まずいな……と思ったのは、その『抜き身のサーベル』という性格の比喻と見た目そのままを便利に言い表わす恥ずかしい通り名が、こんなところまで広まっていたことを知らなかったからだ……。

「くっ……！」

呻きながらもヨアヒムの奴はレイピアを振るわせ、その剣先を下げる。或いは奴こそ権威に弱く、そうして王家の名を出されれば跪くほか無かったのだろう。

だが俺は言った。

「いいんだぜ？　ヨアヒム、剣を構えろよ。　貴様も俺の噂くら

いは聞いているだろう」

「う、噂……でございますか？ 殿下……」

ああ、と俺は頷いて見せた。

「出来の悪い三男坊で、手が付けられないってな。だから決闘の一つや二つ、今更どうってこともない。或いは貴様が俺を傷付けたとて、俺が喧嘩をふっかけた、とこいつらはきちんと証言するだろう。終いに悪いのは、俺と言うことになる」

背後を親指でさすと、仲間達が、そうだ、と笑って声を上げる。

もとより身分で押し返す気など毛頭無い。

「しかし……」

そうして齒噛みする奴の様子を見て、俺はふっ、と笑った。

「お前ら貴族の間で、秘かに小馬鹿にされてんのは分かってんだよ……。それともお前もあれか？ こうやって年下の平民虐めてるくらいだし、裏でこそそこそ陰口しか叩けねえ口なんだろう？ 女みたいな野郎だな。『母様のコートがあ』か、笑わせるぜ」

俺の仲間がぷつと吹き出し、更に上手い具合に煽る。

「そりゃ可愛そうだぜ、アルフレト。お母様あん！俺も会いたいにゃ〜ん！」

このときヨアヒムの顔色に、さっと赤みが注したのが分かった。

「なかなか仰る……」

奴は齒噛みし、その犬齒が剥き出しになった。

「ならば殿下はその荒ぶる『狂王』の血の捌け口をお探して、そのお相手をわたしに務めよと仰られるか？」

「つたく……面倒くせーなあ」

俺はヨアヒムのコートに唾を吐きかけた。

腰の辺りに見事に命中する。

「これでいいだろ？ かかって来いよ。男は剣先で話すもんだ」
ヨアヒムがコートにかかった唾を見つめ、やがてぎゅっと柄を握り絞めるのが分かった。

「やってくれるね、王子様……」

「その意気だ。やっと本音が出たじゃないか。」

打ち込んでこい

よ、平民虐めの腐れポンカン貴族野郎が」

「そうして……まさか民草の味方になったつもりでいるんじゃないだろうね？」

ヨアヒムは間合いを取り、レイピアを真っ直ぐに構え、クククと肩を揺らせて、続けた。

「まったく、笑えてくる。……そうして政治のこともろくに分からず、ただ遊び歩いているだけの男が、この僕よりも偉い、王子様だなんてね」

俺は動じない。もとより聞き慣れた台詞だし、それが貴族大方の本音だと分かっている。

俺は奴の剣先を見つめた。

「立派なレイピアだぜ……。新品か？　それで恐らく試し斬りでもしたくなっただらうが」

「ああ、そうだよ殿下、ご名答」

奴が邪悪な笑みを零す。

あまりに禍々しいその瞳の色に、俺は一瞬目を細めた。

「平民は貴族にかしずき、その身体をも差し出す、我らの家畜だ……。産まれた時からそう決まっているんじゃないか。……その才覚が無いにも関わらず、貴様が王家の男であるのとまるで一緒というわけサアア！」

金切り声で言うと同時にヨアヒムは目を剥き、剣先を突き立て一気に踏み込んできた。

凄まじい風圧と、殺気。

あつ！　とその場にいる者達が息を呑んだ。　通常、仕切りの声がなければ決闘は始まらない決まりがあるからだ。

だが俺はかまわずぶらりと下げた右手で、つつかけたサーベルを取り上げた。

刹那、金属音が響き渡る。

抜き身のサーベル　縦横無尽に振り抜けるその一撃が、俺の必殺の一撃だ。

何よりも速く、何よりも強い。

ブチ折れたレイピアが雪の降り始めた空に回転し、どっ！と地面に突き立った。

一瞬の勝負。

俺の鼻先にあるヨアヒムの首の前で、肉厚のサーベルがぴたりと止まっていた。

「才覚じゃない」

俺は奴の耳元で脅すように囁いた。

「俺は力で貴様ら貴族や兄上達に対抗する。力と、圧倒的な恐怖を以て。分かるか……！」

「そっ……！」

不様に折れたレイピアを手にしたまま、ヨアヒムは首に刃先を立てられて動けない。

俺の手に、奴の赤い血が滴った。

「お前で十人目だ。こうして秘かに貴族を血祭りに上げるのはな……」

「ば、馬鹿な……！ やめてくれっ！」

「やめてくれ？ てめえ、さっきあの子がそう言ったとき、やめたかよ？」

返事は待たない。

おおおお！ と俺は力を込め、叫んだ。

首もとで剣を引けば、奴はその場でくずおれる。貴族の意地も、体面も関係無く。そうやって俺は、死ねば誰もが土に帰るだけなのだと教えてやるのだ。

そうしてやがて 奴の足元、降り積もり始めた雪の上に花が咲いた。小さな、黄色い花。際限なく広がる鮮やかな色が奴の裾からしたたる。まるで即席のレモン・シャーベットだ。

ちっ！ と俺は舌打ちして、『抜き身のサーベル』をベルトに収めた。

もち、貴族を斬り殺したことなんざない。奴を泣かせる為のハッ

タリだ。違つところから涙が出ちまったのは、ちよいと計算外だったが。

「帰るぞ」

俺が言つと、仲間達は腰を抜かした平民の子の腕を引っ張つて、土手を上がつて行く。笑いは無しだ。勝負あつたところに追撃はかけないのが俺達の流儀。

そうして後には恥辱に震え、打ち込んだ姿勢のままみるみる雪だるまになるヨアヒムと、それを気まずく見守る仲間達が残された。

仲間の前で失禁とは少々可愛そうにも思つたが、気に掛けてやればそれこそ奴のプライドはずたずたになるだろう。

「怖かつただろう？」

やがて土手の上まで来ると、俺はにっこりと笑んで平民の子の頭を撫でてやつた。が、しかし……。

「ああああ、アルフレトお……？」

子供はめちやめちや震えていた。

脅されていたときよりも、更に酷く。ガクガクと白目を剥いている。

「えつ……なに、どうしたの？」

「あああの馬鹿王子の鬼畜人間アルフレトに殺されるうつつ！」

お助けええええ！」

「ちよっ」

俺の手を逃れる。

ええええええ！ と叫びながら、子供はコートを放り出し、脱兎の如く逃げていった。

今度は俺の頭に雪が降り積もる番。

「無理もねえ」

仲間の一人が、俺の髪を払つて言った。

「あれだけしよっちゆう無茶苦茶やってりゃ、子供だってびびって近付かねえわ」

皆がげらげらと笑う。

そつ……。ええ！？俺って結構、本気で正義の味方っぽい感じのことをやってたつもりだったんですけどっ！？

だが見渡してみれば確かにそこには、軍物のコートを負った敵っついで、男臭い集団のがあったのだった。……だから或いは「へへへっ！この獲物は頂いていくぜえっ！」的に、俺達がああ貴族連中から虐める相手を奪ったのだと思われたかも知れないが……。

それにしたって、凹む。

そうして失意に頂垂れた冬。俺は行き当たりばったりで暴れることを止めた。

強いだけでは意味がない、と気付いたのである。

いくら貴族共に嫌われようがかまわない。が、国民全てに避けられるのは王子として痛すぎる……。だから成人を迎えると共に妃をもらって心機一転、ステキな王子に生れ変わってやろうと心に決めたのだ。

いや実際、母上や兄上も、この薄幸の美少女を俺が嫁に頂くことになってびっくり仰天していたものだった。

ふうん、あのアルフレトがねえ……。

誰も口には出さないが、意外とやるじゃない、的な驚きと焦りがあったことを、結婚式の場でも確かに感じた。そんな彼らを横目に、俺はしてやったりと言った感じであの赤絨毯を踏んだものだった。そうして『ザ・アルフレト物語』成人・飛翔編』は、これから華々しくその幕を開けるはずだったのだが……。

本当どうして、こうなった……。

「その……申し訳ありません」

揺れる車上で、俺の心中を察したように、カサンドラは顔を伏せた。

「いや……」

思い出に耽るのを止め、俺は姿勢を直して応えた。

いやそう……曲がりなりにもあの男気溢れる、父上と戦場で轡を並べたユアハイム公の子なのだから、あまりにつっけんどんな対応は亡くなった公に対しても失礼だという気がする。

「って言うかとりあえず、悪気が無いのはよく分かったし……。それからやっぱり、話し方は普通にしてくれないか？ とにかくその……そういう物言いは息が詰まって仕方無い。苦手なんだ」

「わかり、……分かった」

少し言いにくそうにして、けれど懸命に奥歯の端から言葉を捻り出そうとするカサンドラ。こういう所を見ていると、実に健気だとも思うんだが……。

「民草に触れるときだけ丁寧語にしてくれば、それでいいから」
「う、うん。わかった。気をつける」

そうしてカサンドラは何事かを確認するように膝の上の手の中を見つめ、わき、わき、と二回握りしめた。なんの動作なんだろうか？ しばし、沈黙。

しばらくして再びカサンドラが口を開いた。

「けれどどうして、士官学校に？」

「まあその、なんだ……行ってみれば分かる……」

俺は車窓から行き過ぎる深緑を遠い目で見やった。

半ば思いつきで飛び出してきたことに少々後悔もするが、しかし

このまま何も手を打たずにいるというわけにもいかない。

「あの女の人、凄い顔をしてた」

「女の人？ ああ、そうだな……」

メイド長のことだ。俺は思い出し、吹き出しそうになった。

髪もぼっさばさのままカサンドラを連れ出そうとしたらカンカンになって、キーキー虫みたいに鳴いていた。あのメイド長はどうも苦手だ……。お陰で二人きりの寝室でガリガリとカサンドラの髪をブラッシングしてやり、この俺が身支度を調べてやる羽目になってしまった。

いやあのおばさんとて、カサンドラの世話を押し付けられた、み

たいなポジションなのは大体分かるが。重ねて言うが、城内に好んで俺と関わるうとする者など皆無だ。　しかしだからこそ、これらの問題を一気に片付ける手を思い付いたのだ。

答えは士官学校にあるっ！

「アルフレトオ！」

御者台で幼馴染みの荒くれ者、グリード・『マッド』・デッカーが叫んだ。

「おう！　なんだグリード？」

俺は力強く応えた。　ちなみに呼び捨てでいい、というのは仲間内の暗黙の了解である。

「姫さんさえよければだけど、もうちょい飛ばしたいんだが！　一雨来そうだ！」

目線で問い掛けると、カサンドラは頷いた。

「大丈夫なのか？」

凄まじく揺れると思うんだが。

「うん。馬は好きだし、平気だ」

「そうか」

さすがは男だ。面倒臭くなくて助かる。頷いて、俺は背後　御者台に接する壁を威勢よく、ばあん！　と平手で叩いてやった。その合図に、マッドの異名を持つスピード狂が、ひゃっはあ！　と雄叫びを上げて鞭を入れたのが分かった。

「がくん！　と加速で身体を持っていかれて、俺は体勢を崩しカサンドラの膝に手を着いた。

「あ、ごめんごめん」

「う、ううん！」

何やら高速で首を振る。

「全然いいんだ！」

ぱあっと向日葵みたいに晴れた顔が真っ赤だった。俺は少しだけ、泣きたくなった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1096ba/>

俺の妃のそれがそんなに立派な可能性少くないわけがない

2012年1月4日09時48分発行